

短報

静岡県におけるタヌキノショクダイの自生地 (松本雅道, 山田辰美)

Masamichi MATSUMOTO and Tatsumi YAMADA : New Locality of *Thismia abei* (Akasawa) Hatusima in Shizuoka Prefecture

タヌキノショクダイについて

タヌキノショクダイ *Thismia abei* (Akasawa) Hatusima (ヒナノシャクジョウ科) は、1943年に阿部近一氏が徳島県阿南市の石灰岩上の常緑広葉樹林において初めて1個体を採集した(本田, 津山1948)。その後、篠原 勇氏が徳島県那賀郡木沢村で化石採集の際に石灰岩上のスギの人工林で自生地を発見し(阿部1950)、赤澤 (1950) が *Glaziocharis abei* Akasawa として記載した。Hatusima (1976) は *Glaziocharis* を *Thismia* の一

つの節と考え、*Thismia abei* (Akasawa) Hatusima とした。九州では、花房憲正氏が宮崎県都城市において火山岩上の常緑広葉樹林でこれを発見した(新1974)。その後、徳島県、宮崎県で新たな自生地は発見されていない(平田1984, 阿部1990, 室屋, 南谷1992)。

佐竹 (1982) はタヌキノショクダイの分布を「四国(徳島県)・九州(宮崎県・鹿児島県)」とした。しかし、筆者の行った地元の植物研究者への照会では、鹿児島県の自生地を確認できない。

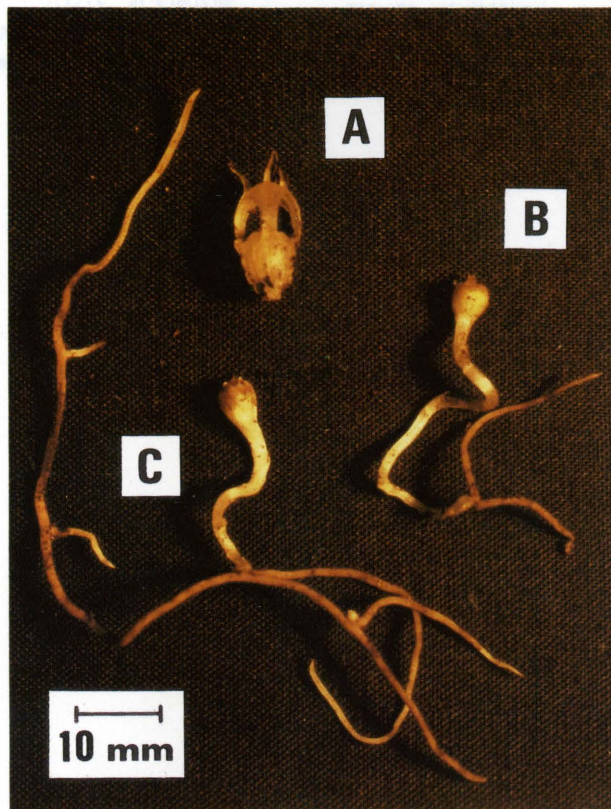


Fig. 1. *Thismia abei* (Akasawa) Hatusima. A. Floral tube. B, C. Mycorrhiza with immature fruit.

初島 (1978) は鹿児島県の植物目録にタヌキノショクダイをあげ、「御池」に自生地があるとした。しかし、巻末の地名索引には「御池」は鹿児島県ではなく宮崎県都城市の自生地を示すものであることが記されている。この目録が鹿児島県に自生地があるという誤解をまねいた可能性がある。

静岡県伊東市の自生地

1993年8月2日、筆者の一人である松本は、静岡県伊東市において陸貝採集の際にタヌキノショクダイと考えられる植物を発見し、未熟な果実をつけた2個体と脱落した花筒1個を採集した (Fig. 1)。金沢大学の清水建美教授にこの植物の同定を依頼し、タヌキノショクダイ *Thismia abei* (Akasawa) Hatusima であると確認できた。標本は筆者が保存している。今回の自生地の発見は本州で初めて、日本では4番目のものであり、分布の北限にあたる (Fig. 2)。

伊東市の自生地では崖の下に堆積した、やや湿潤な落葉層に生育する。発見した群落では約1 m² に19個体が生育し、1993年の花期の後に5個体が結実したことを確認した。また、1.5m 離れて別の群落を発見し約0.1m² に16個体が生育すること

を確認したが、この群落の同年中の結実数は不明である。

自生地は玄武岩質の溶岩流が形成した台地を開く谷の南南西斜面で、標高は約40mである。周辺の植生は、カラスザンショウ、アカメガシワ、コナラなどの落葉広葉樹が高木層を形成し、亜高木層以下にはシロダモ、タブノキ、ヤブニッケイなどの常緑広葉樹をまじえ、遷移途上の二次林である (Figs. 3, 4, 5)。台地上および斜面の林床はホソバカナワラビ、崖の下の平坦部はフウトウカズラが優占する。他の産地は常緑樹林であるが落葉樹林でのタヌキノショクダイの自生地は初めての記録である。

おわりに

木沢村のタヌキノショクダイの自生地は国の天然記念物、都城市の自生地は市の天然記念物として保護されているが、阿南市の自生地は石灰岩の採石のため絶滅した。したがって、この植物は伊東市を含め3ヶ所でしか自生していない。しかも、各自生地では極めて狭い範囲にしか生育せず、個体数も少ない。今回の自生地の発見が種の保護にはたす役割は大きいと考える。また、伊東市のタ

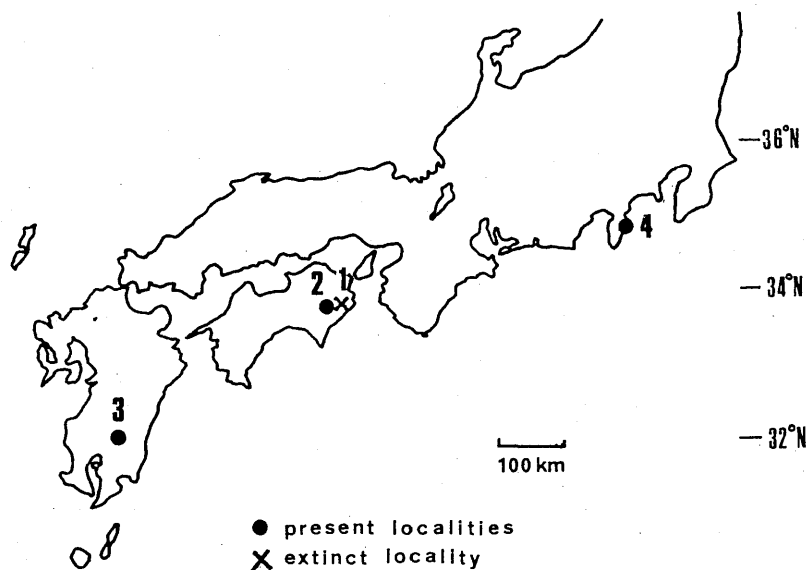
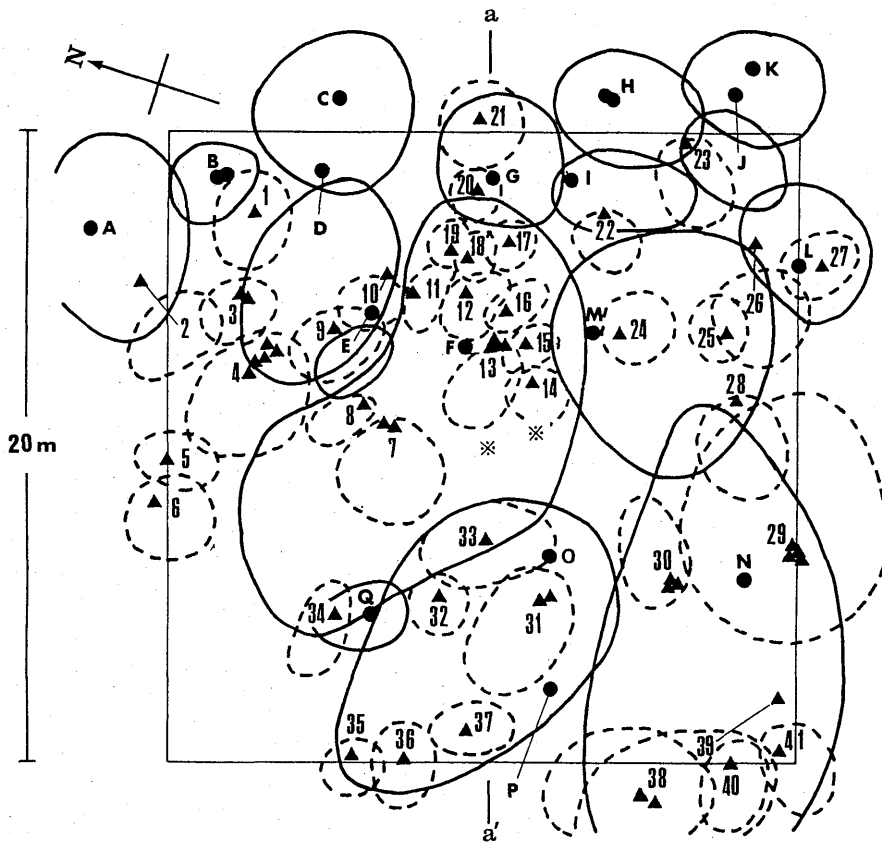


Fig. 2. Distribution of *Thismia abei* (Akasawa) Hatusima. 1. Anan-shi, Tokushima. 2. Kizawa-son, Tokushima. 3. Miyakonono-shi, Miyazaki. 4. Ito-shi, Shizuoka.



Cryptomeria japonica, (24)15cm. *Quercus serrata*, (B)5cm, 9cm, (C)18cm, (D)14cm, (G)15cm, (M)26cm, (2)16cm, (17)7cm, (19)14cm, (27)11cm. *Quercus myrsinaefolia*, (11)5cm. *Cellis sinensis* var. *japonica*, (39)29cm. *Morus australis*, (36)10cm, (37)5cm. *Ficus erecta*, (29)7~9cm, (32)6cm, (41)7cm. *Cinnamomum camphora*, (9)6cm. *Cinnamomum japonicum*, (5)9cm. *Machilus thunbergii*, (4)7~15cm, (33)9cm. *Neolitsea sericea*, (1)5cm, (3)6cm, 6cm, (12)10cm, (16)11cm, (20)6cm, (25)5cm, (38)11cm, 13cm, (40)6cm. *Eurya japonica*, (21)11cm. *Prunus* sp., (F)38cm. *Aleurites cordata*, (10)6cm. *Mallotus japonicus*, (A)16cm, (E)8cm, (H)12cm, 13cm, (I)11cm, (J)28cm, (Q)11cm, (13)6~8cm, (18)15cm, (22)9cm, (23)8cm, (26)10cm. *Zanthoxylum ailanthoides*, (K)22cm, (L)16cm, (N)29cm, (O)29cm, (P)25cm. *Stachyurus praecox*, (6)5cm, (7)5cm, 7cm, (8)6cm, (14)5cm, (15)5cm, (28)7cm, (30)5cm, (31)5cm, 7cm, (34)5cm. *Aralia elata*, (35)6cm.

Fig. 3. Crown projection diagram of the site in Ito-shi. ●(A-Q). Tree layer. ▲(1-41). Sub-tree layer. Trees (DBH>5cm) are shown here. ※. *Thymia abei*. The profile a-a' is shown in Fig.4.

ヌキノシヨクダイの自生地には、ホンゴウソウ *Andruris japonica* (Makino) Giesen も生育している。この植物も静岡県では採集記録がなく、日本でも自生地の記録は少ない。これらの貴重な腐生植物の自生地の保護対策が、関係者により早急に取られることを切望する。

同定ならびに貴重な御助言をいただいた金沢大学清水建美教授、既知の産地についての文献、情報の収集に御尽力をいただいた小川 誠氏、南谷忠志氏、井上 悟氏、西 紘平氏に深く御礼申し上げる。

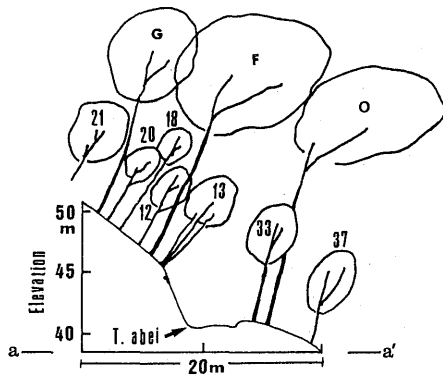


Fig. 4. Profile of the habitat. Marks are shown in Fig. 3.

引用文献

赤澤時之 1950. 日本産 *Glaziocharis* の一新種に就いて, 植物研究雑誌 25: 193-196, pl. I-II.

阿部近一 1950. タヌキノショクダイの生活環境. 植物研究雑誌 25: 197-199.
—1990. 徳島県植物誌. pp. 580. 教育出版センター, 徳島.

Hatusima S. 1976. Two New Species of Burmanniaceae from Japan. J. Geobot. (Hokuriku) 24: 2-10.

初島住彦 1978. 鹿児島県植物目録. pp. 234. 鹿児島植物同好会, 鹿児島.

平田正一 1984. 宮崎県植物誌. pp. 377. 宮崎日日新聞社, 宮崎.

本田正次, 津山 尚 1948. 阿部近一氏発見の“奇怪なる植物”. 植物研究雑誌 22: 27-29.

佐竹義輔 1982. ヒナノシャクジョウ科. 日本の野生植物. 草本 I. pp. 63-64. 平凡社, 東京.

新 敏夫 1974. 南九州産タヌキノショクダイ属 2 種. 植物研究雑誌 49: 3-6.

室屋瀧雄, 南谷忠志 1992. 宮崎の維管束植物. 宮崎県の生物. pp. 55-84. 鈺脈社, 宮崎.

(常葉学園短期大学附属環境システム研究所)

ヤマクボスゲの分布 (黒沢高秀^a, 庄子邦光^b)

Takahide KUROSAWA^a and Kunimitsu SHOJI^b: Distribution of *Carex hymenodon* Ohwi

ヤマクボスゲ *Carex hymenodon* Ohwi は, 1931 年にその和名の由来である栃木県日光町山窪 (現日光市山久保) で初めて発見され, その翌年に見つかった栃木県大沢村 (現今市市) 浅間山産の標本に基づいて記載された (Ohwi 1932, 関本1951). その後, 本種の生育地が他に数カ所見つけたが, いずれも栃木県中部または北部であったため, 本種の分布は栃木県の一部に限られると考えられてきた (吉川1958, 大井1982). しかし, 著者の一人である庄子は, 1978年に本種を宮城県宮城町 (現仙台市青葉区) 上愛子谷津で発見した. その後, 本種は宮城町芋沢銅谷原でも見つけた (庄子1983). これらの場所は, それまで考えられてきた本種の分布域からかなりかけ離れている. そのため, 宮城県内のヤマクボスゲが本来の自生であるかどうかを確認するとともに, 本種の分布域を再検討する必要がある. そこで, 他に本種の生育地がないかどうか宮城県内を探索するとともに, 標本および文献を調査し, 本種の分布をあらためて検討した.

その結果, 現在までに, 宮城県から5カ所のヤマクボスゲの生育地が確認された (Table 1). これらの生育地は, いずれも仙台市の周辺に位置し, 仙台平野を囲む丘陵地の比較的広い範囲に点在していた. 本種は, 主にコナラが優占する二次林の林床や伐採跡地の, 沢沿いの泥の堆積した湿った場所にパッチ状に点々と生え, しばしばミヤマシラスゲ *Carex olivacea* Boott var. *angustior* Kunt. やミゾソバ *Persicaria thunbergii* (Sieb. et Zucc.) H. Gross と混生していた. これらの生育地の中で, 特に富谷町明石の生育地は生育状態が良好で, 株数も非常に多く, 本種に関して最大規模の個体群を形成していた. このような宮城県内の生育地の数, 広がり, 規模から考えると, 最近になって本種がこの地域に偶発的に出現したのではなく, もともと自生していたにもかかわらず見過ごされていたものと考えられる.

また, ヤマクボスゲは, 今までのところ栃木県中部から北部にかけての地域と宮城県仙台市周辺の10カ所余りでしか見つかっておらず, 福島県の